



■ コロナ禍での学生教育の工夫 <在宅看護実習>

在宅看護実習は、実習施設に出向き、療養者さんとご家族に接する最後の実習で、4回生の9月～11月のうちの8日間（90時間）で行います。現在、日本では少子高齢化や人口減少に対応するため、地域医療体制の適正化と地域包括ケアシステム構築が進み、療養者さんは病状に合わせて適切な医療の場を選択しながら、住み慣れた地域や在宅で生活することを目指すようになってきました。そのため、看護者には、病院での治療だけでなく、在宅でいかに生活するか、場合によっては在宅での看取りの支援までもが求められており、大変重要な実習となります。

今年度は、COVID-19の流行状況などから、学外実習と学内実習を併用しながら実習目標の達成を目指しました。学外実習では、訪問看護ステーションの看護師さんと一緒に療養者さんの自宅を訪問して、「病気を持ちながらも自分らしく生活するとはどういうことか」「患者さんの生活を支えるために看護職が行うべきことは何か」を考え、ケアマネジメント・看護計画を立て、実践しました。また、カンファレンスや助言を頂く際にはWebを活用するなど、感染予防の工夫を行いながら在宅看護の実際に触れる機会をもちました。さらに、療養者さん宅周辺の探索や、利用できる施設やサービスの調査、福祉用具展示の見学を通して「サポートを取り入れながら地域で生活すること」への理解を深めました。

学内実習では、模擬事例を用いて療養者さんに必要な看護を考えるだけでなく、演習室で療養者役、家族役、看護師役を演じながら、「生活の場で、自宅にあるものを工夫して看護する」ことや、「ご家族への関わり方」などを学ぶと同時に、動画を用いて、退院後に訪問看護を取り入れる場面、看取りの場面など様々な状況での看護を学ぶことができました。

卒業後は、様々な職場に分かれ、各自が目標とする看護を行っていきます。この実習で学んだことを活かして、看護の対象者がどの場所においても「その人らしく生活する」ことを支えていってくださることを願っています。



fure-fure



■ 学生の活動

【グローバルクラブ】

部長：3回生 曾木杏香さん

グローバルクラブは、主に高知県に暮らす外国人の困りごとや課題を学生と共に解決していくことを目指して国際交流を行っている団体です。まだまだできたばかりの新しい団体ですが、これまでの活動の中では、他機関の協力も得ながら在留外国人の方々や留学生にインタビューを行って課題を見出し、翌年度にはその課題に対する取り組みとして、国際交流を行う高知大生と共にオンラインワークショップを開催しました。具体的な内容としては、「国際交流×SDGs」というテーマを挙げ、JICA青年海外協力隊OBの方々にご講演いただいたり、留学生を含めてディスカッション等を行い、国際交流を通して多様な視点からSDGsについて学んでいきました。今はコロナ禍によって外国人の方々と接する機会も少ないですが、その中でも国際交流が続くように頑張っていきたいと思っています。



【室戸ボランティアリーダー】

部長：3回生 横山瑠奈さん

室戸ボランティアリーダーは高知大学と高知県立大学の学生を中心に、国立室戸青少年自然の家や県内の公立青少年教育施設で行われる「教育事業」で子どもたちの体験をサポートする活動を行っています。教育事業では、小学生を中心とした幅広い年齢の子どもを対象に、キャンプファイヤーやスノーケリング、秘密基地づくりなど様々な自然体験活動を行っています。また、教育事業以外にも大学生が内容をゼロから企画する自主企画事業や大学生同士が仲を深めるためのイベント、リーダートレーニング（自主研修）なども多数実施しています。

2021年度は昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響で子どもたちと対面での活動ができない期間も多くなりましたが、オンラインイベントや大学のグラウンドを使用した活動などコロナ禍でも実施できる方法を模索して活動を行いました。



【ニュースレターの名前の意味】fure-fure 学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。 fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp



遠隔授業推進への全学的な取り組み

コロナ禍によって、「当たり前」と思っていた生活が一変して2年目が終わろうとしています。この2年間、様々な制約がある中でも、学生の皆さんの学びを継続できるように、教職員一同、取り組んできました。

遠隔教育の推進は、コロナ禍以前から文部科学省の方針として示されていましたが、本学では今回のコロナ禍を受けて本格的な導入となりました。昨年度は授業開始を2週間遅らせ、この間に教員に対してMoodleの活用、WEBを使った教材の作成や授業の実施に関する研修を開催、学生の皆さんに対してはMoodleの設定に関する説明や相談会の実施、相談窓口の設置など、遠隔授業の実施体制を整備しました。当初は、機器トラブルなど、学生の皆さんにも負担をかけましたが、その後通信環境の整備によりトラブルも減少し、学生・教員双方が遠隔授業にも少しずつ慣れてきたように思います。

昨年3月に学生の皆さんを対象として実施した遠隔授業に関するアンケートでは、「授業によってやり方や量が違う」「知識や技術がどのくらい身についたかわからない」などの意見もありましたが、「自分のペースで学習できる」「繰り返し学習できて復習できる」「自分で調べ考えることが多くなり、より深く理解できた」などの良かった点が挙げられていました。この結果から、学生の皆さんが遠隔授業であっても自ら学ぼうとする姿勢を持ち、主体的に取り組んでいることがわかりました。また、昨年12月には、この2年間の遠隔授業への取り組みを各学部の教員が発表するFD研修会を開催、そのメリットとデメリット、より効果的な学びとするための工夫などについて共有し、遠隔授業をうまく取り入れることで、豊かな学びにつながる可能性が見えてきました。

本学は、資格取得のための学外実習も多く、全ての科目を遠隔だけで行うことはできませんが、“Withコロナ”の社会の中で、遠隔授業と対面授業それぞれのメリットを活かして、学生の皆さんの知的好奇心を刺激し、学びへの意欲を高める授業に取り組んでいきたいと思っています。

教務部長:長戸和子教授



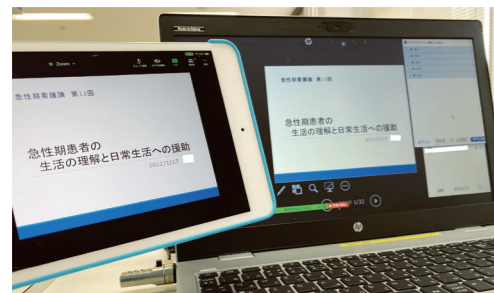
遠隔授業推進への看護学部の取り組み

遠隔授業推進プロジェクトリーダー:佐東美緒准教授

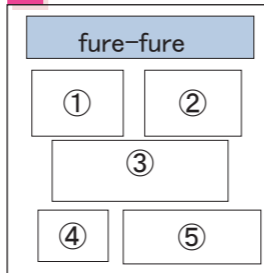
新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、学生の安全な学修環境を確保するため2020年4月から全面的な遠隔授業が開始されました。遠隔授業のシステムは、以前から導入されていましたが、全面的に遠隔授業になる経験は教員もはじめてのことでした。看護学部では遠隔授業推進プロジェクトを立ち上げ、効果的で魅力的な授業、演習、実習ができるように、教員が提供した遠隔授業科目について、学生のみなさんへアンケート調査を行いました。その結果をご紹介します。

約80%の方がパソコンで受講し、その他、スマートフォンやタブレットなど、受講する場所や教科によって、通信機器を使い分けていました。前期は、「課題を行うために時間がかかる」「慣れない」と感じ、後期には「授業がスムーズに受けられる」「慣れる」といった感想が聞かれるようになりました。遠隔授業は、「対面授業より自分のペースでできる。人の話し声がないため集中しやすかったし学びやすかった」「授業内容を何度も振り返れるのはメリットだと思う」など、利点について回答されていました。一方で、「対面授業の方が、遠隔授業よりも学んでいる感じを強く感じた」「教員へ質問しづらい」「寂しく感じたり、教え合ったりする習慣がなくなってしまった」などの意見もありました。

調査は、前期と後期に実施し、調査結果は教員へ伝え、遠隔授業内容改善に役立てられるようにしました。また、教員は、遠隔授業に関する研修会に参加しながら、教授方法の改善を行っています。現在は、感染拡大状況によって遠隔授業と対面授業を組み合わせ、感染防止対策に取り組みながら授業を行っています。大学のインターネット環境も改善され、遠隔授業でも双方向型遠隔授業(ライブ配信)などを行う授業もあり、学生や教員とのつながりを維持できるような工夫もされています。感染収束には、もう少し時間がかかりそうですが、遠隔授業の良い点は取り入れながら、学びの継続を支えていきたいと考えています。



表紙の写真



- ①3回生:領域実習前オリエンテーション(感染予防対策)
 - ②4回生:看護実践能力開発実習
 - ③2回生:クリスマス会
 - ④⑤1回生:学内演習
- ※実習・演習はモデル人形を使用

各学年の大学生生活

■1回生■



1回生は高知医療センターで患者さんやご家族に対して施設案内のサポートなどのボランティア活動を行っています。写真は、ボランティア活動に向けた演習風景です。本年度はコロナ禍により施設でのボランティア活動には参加できませんでしたが、学内で車いすや視覚障がい者のガイド演習を行い、ボランティア活動時の心構えや、ガイドする時の注意点などを学びました。

さらに、12月には初めての実習となる「ふれあい看護実習」がありました。医療施設の様々な専門職の方の話を伺い、看護師さんに同行し、患者さんへのケアを見学することで、看護の役割について考えました。また、模擬患者さんとの会話から適切なコミュニケーションについても学びました。これまで学んできた知識や技術を活用し、将来目指す看護への学びを深めています。

コロナ渦の中、自らの健康管理にも留意しながら、学内外の様々な場での経験を積み重ね、日々成長しています。

■2回生■



2回生は、夏期の看護基盤実習ではコロナ禍の感染予防対策により制限の多い実習となりました。そんな中でも「言葉で患者さんを理解すると言うけど実際は難しかった」や、「看護師さんのケアのスピードに驚いた」など、臨地実習でしか得られない、多くの学びがあったようです。そして、患者さんをより理解するために必要な病気の理解や、患者さんに安心してもらえる看護技術の習得に向けてたくましく取り組んでいます。また、授業ではグループディスカッションやプレゼンテーションで自分の考えを論理的に他者に伝える力も磨いています。

学外活動では、看護地域フィールドワークや立志社中、サークル活動などで、地域の方々の健康維持や病気予防のためにできることを自分たちで見つけて行動することを通して主体性を養っています。

■3回生■



領域看護実習を終えた3回生は、将来どの分野の職種に就きたいのか、どんな看護がしたいのか、将来の進路を本格的に決定する時期になりました。病院や施設からだけでなく、卒業生や先生方からの情報収集をとおして、志望動機を明確にしながら準備を行っています。

写真は、看護研究発表会の開催に向け、4回生から引継ぎを受けている3回生の様子です。毎年、3回生が発表会の司会進行など企画・運営を担います。これまでコロナ禍のなか、グループ活動等の制限があり、話し合う場が少なかった3回生にとって、先輩方との交流は大変貴重な機会となった様子です。先輩方が取り組んだ研究成果の共有が効果的にできるよう、一生懸命みんなで頑張っています。2月下旬には自分たちの看護研究グループも決まります。今年も遠隔による講義や演習が続くなかで、乗り越えてきた仲間同士、看護研究の計画書の作成に向けて取り組んでいきます。

■4回生■



4回生は11月、今までの実習経験と学習を統合できるように、最後の臨床実習である在宅看護実習、看護実践能力開発実習に取り組みました。11月24日には国家試験の受験願書等を作成し、12月初旬に1年間取り組んだ看護研究を論文としてまとめて提出しました。現在は看護師・保健師・助産師国家試験に向けて各自自己学習を積み重ね、毎週開催される学習会では模試の結果を振り返り、繰り返し学ぶことで知識の定着に努めています。写真は、「医学と看護の統合」の講義の1場面、池田先生から看護師国家試験の出題傾向、出題頻度の高い問題のポイントが豊かに詰まった講義を受けているところです。

各自、問題集、国試対策本を活用し、個々人の学習スタイルを磨きながら合格に、そしてその先の夢に向かって走り続けています。このfure-fureがお手元に届く頃には、国家試験の受験を終え3月25日の合格発表を待ちながら、卒業の準備をしている頃と思います。